道祖神に助けられた話

時は文化二年、秋も末の頃、妻や下男に見送られた桐屋藤右エ門が桑折の家を出たのは、今の午前三時を過ぎたばかり、ようやく一番鶏の声が聞えた頃だった。藤右エ門は、今日の市でひと働きをするため、きのうまでに集めた大枚の金子をシッカリ腰に結び阿武隈の渡しを早目に渡り、保原から掛田、月舘を夜明け前に越えるつもりで道を急いだ。掛田も過ぎ小国にはいると小国川の橋があり狭い板橋である。やがてそこから上り坂となる。左に松林、右に田んぼ、用水沼と続く、人家もなく淋しく薄気味の悪い峠道である。その頃の道巾は精々二米位で当時は堀割りもなかった。そのような淋しい場所だから、昔から追はぎが出たという話をきかされていたし、また用水沼には、入水して死んだとか、殺して投げ込んだとかの話もあった。未だ暗い。人っ子一人通らない。一刻も早く通り過ぎたいものと、ますます足を早めるのだった。坂道を半分位登った頃、藤右エ門は後の方に異様な気配を感じて後をふりむくた。未だ暗いのでハッキリとはわからないが確かに何かが来たようである。それもこちらの様子を、うかがいながら、後をつけてるような感じがしてきた。藤右エ門は自分に落ちつけ落ちつけといい聞かせながら、少しゆっくりと歩いてみた。後の人もユックリ来るようである。急げば後の人も急ぐ。ある間隔を保ちながら、これはつけられたと考えたとき、藤右エ門は、背筋に冷たいものが流れるのを覚えた。追はぎだ、と直感した。身体はガタ〳〵ふるえ、足はクく〳〵もつれ、いくら前に進もうとしても一寸も進まない。腰に巻いた金の包みが急に重く感じた。

「もう駄目かと観念もしたが、やはり心の底では、なんとかして助かりたい。」一心である。金は後で働けば